

会報

No. 108

令和5(2023)年3月15日

<https://www.library.pref.kyoto.jp/k-lib/council>

京都府図書館等連絡協議会

事務局

京都市左京区岡崎成勝寺町

京都府立図書館内

TEL (075) 762-4655

<目次>

1面

・読書の仲間を増やしたい！醍醐中央図書館ジュニアライブラリアン
(京都市醍醐中央図書館)

2面／3面

・学校等と図書館との連携について(城陽市立図書館)
・「よるのとしょかんたんけん」の取組について(京丹後市立あみの図書館)
・中部研修参加報告(京都学・歴彩館)
・北部研修参加報告(京都府立図書館)

4面

・図書館でボードゲームをしよう～町内で就労されている外国の方を迎えて～(宇治田原町立図書館)
・第31回京都図書館大会を開催しました(京図連協事務局)

読書の仲間を増やしたい！ 醍醐中央図書館ジュニアライブラリアン

京都市醍醐中央図書館 松本 千穂

七月二十五日から三十日にかけて、醍醐中央図書館にてジュニアライブラリアン養成講座を開催しました。ジュニアライブラリアンとは、「子ども司書」という名前で知られています。この活動は、子ども同士の本のすすめ合いを促し、読書の輪を広げるために、本が好きな子ども達に読書のリーダーになってもらい、新しい形の読書推進の担い手になってもらうというものです。醍醐中央図書館で子ども達に司書の仕事を知って、図書館を身近な存在と感ずるところで、学校の垣根を超えた読書の仲間を増やし、本の面白さや読書の楽しさを自分の学校の友達に伝えてもらうという、そんな活動をしたいと企画をしました。

児童担当者で話し合いをすすめ、「ジュニアライブラリアン」という名称に決定しました。対象は小学校四年生から小学校六年生。中学生も希望があれば参加可として募集をしました。日程は、小学校高学年や中学生になると学校の部活や習い事など忙しいことを考慮し、夏休みに入ってから五日間集中的に実施することに決めました。合計で九名の児童生徒が申込をしてくれました。司書として図書館の役割や司書の仕事をどのように伝えたらよいか、試行錯誤

誤を繰り返しながら、養成講座のカリキュラムを考えました。

まずは図書館を見学し、図書館についてのクイズを解いたり、検索機で本を探したり、カウンターで貸出・返却の仕方などを学びました。図書館では本がどのようなルールで並んでいるのか日本十進分類法について知り、本の修理やブックカーのかけ方を学びました。本で調べ物をする「レファレンス」という仕事もあります。京都市図書館のレファレンス事例の中から、小学生向けのものを選び、実際に自分たちで辞書や辞典を引いて、レファレンス報告書を書いてもらいました。また、司書が実際にブックトークを行い、どのような手法か聞いてもらい、他にもピリオバトルや本のPOPの作成など、本の魅力や読書の楽しさを紹介する方法を学びました。地域の醍醐いきいき市民活動センターの方を講師としてお迎えしてお話を聞き、ジュニアライブラリアンとして地域でどんな活動ができるかも考えました。

最後は、読み聞かせ講座を受講し、おたのしみ会を実施しました。

受講者はコロナの濃厚接触者があり、残念ながら一名が欠席となり八名でした。コロナが流行している時期だったので、最後まで全員元気に参加できるのか心配もありました。欠席者もなく、最後はレポートを提出してもらい、全員がジュニアライブラリアンに認定されました。

その後の活動としては、醍醐中央図書館の開館二十五周年記念のおたのしみ会「きりんはかせの講演会」や「醍醐味

寄席」の司会など、少しずつ活動をしていきます。ミーティングでは「みんなで本をもちよって」という本のゲームをしたり、これからどんな活動をしていきたいかを話し合う場を持ちました。読み聞かせや紙芝居といったおたのしみ会をして喜ぶ子ども達の様子が見たい、ぬいぐるみのおとまり会、ボードゲーム、ティーンズコーナーでリーディング、テーマを決めた本の展示などいろいろな意見が出ました。今後ジュニアライブラリアンの皆さんには活動を形にして実績を残してもらいたいと考えています。図書館は学校とも家庭ともちがう、またもう一つの居場所となつてもらえたらと思います。私たち図書館職員は先生のように指導するのではなく、一緒に寄り添いながら、活動を共に盛り上げていきたいです。

今後は地域の学校と連携を深めながら、ジュニアライブラリアン養成講座を続けていき、図書館を軸にして読書の仲間を増やしていければと考えています。



学校等と図書館との連携について

城陽市立図書館 奥田 雄二

城陽市立図書館では、子どもの読書活動を推進するために、学校等との連携は重要で欠かせないものと考え、多様な事業や取組を行っています。その中で特に継続してきている二つの取組について紹介いたします。

小学校対象の「おはなしキャラバン」は平成十六年より継続実施しています。市内十小学校に図書館司書が出向き、一年生を対象に図書の見聞かせ等を行っているもので、読書することへの興味・関心を高め、読書活動推進を支援しています。時期としては十一月から月に二校、それぞれ二人の司書が訪問します。ブックトークのテーマは二年ごとに変わっており、今年度のテーマは「動物」です。クイズを出して飽きないような工夫をし、また、児童の反応を見ながら進めていきます。読み聞かせの力量も必要で、司書にとっても鍛えられる取組になっています。

「おすすめブックリスト」の作成と配布は平成二十一年から始めました。当初は幼児用、小学生用、中学生用の三種類で各百冊ずつのリストでしたが、平成三十年からは小学生は「一・二年生向け」「三・四年生向け」「五・六年生向け」に細分化し、冊数も三十冊にしたところ、

三十冊を完読する児童も増えました。幼児向けリストも「〇～二歳向け」「三～五歳向け」に分け、市の担当の部署に協力依頼し、「こんにちは赤ちゃん事業」や「三歳児検診」の際に配布しています。

おすすめブックリストの選定では、図書館の司書、市内に五つあるコミュニティセンター図書室の職員、図書館協議会の委員の方等の意見をいただいて完成しました。リストの本は図書館をはじめ各小中学校で揃えていただいております。市内共通で読書推進に役立てております。

子どもの読書離れが言われ始めて久しいですが、少しでも本を手取るきっかけづくりを意図した取組を今後も進めていこうと考えています。



「よるのとしよかんたんけん」の取組について

京丹後市立あみの図書館 田辺 聖子

今回は、あみの図書館で、平成二十八年から実施している子ども対象の行事「よるのとしよかんたんけん」を紹介します。

内容は、他に利用者のいない閉館後の図書館で、館内探検やスタンプラリーを行うものです。ふだん大きな声を出すことができない空間で楽しく過ごし、特別感を味わうことで、図書館に親近感を持ち、もっと図書館のことを好きになってもらうことが目的です。

始めに館内を案内します。簡単に分類や背ラベルの説明をし、どんなコーナーや資料があるのかを紹介します。また、館内OPACの使い方の説明し、普段入

ることのできない閉架書庫へも案内します。

次にクイズに答えてスタンプを集めるスタンプラリーをします。クイズの内容は、「昔話の本を持ってきてください」や「〇月〇日の新聞を持ってきてください」など、最初の案内で説明した内容がヒントになっているものや分類を利用したものなど、今後の利用に役立つ内容にしています。にぎやかに歓声をあげながら行い盛り上がる楽しいひとときです。

そして最後にはちよつぱり怖い絵本の読み聞かせを行い、記念のプレゼントを渡して終了です。

行事開催中は保護者の付き添いはお断りして、子どもたちだけの参加としています。また、スタンプラリーの時間以外には照明を少なくして薄暗い中で実施し、特別な空間になるように工夫をしています。

当初は夏休み期間に実施していたのですが、令和三年度に緊急事態宣言のため十月に延期して実施したところ、外も真つ暗になり、より「たんけん」の雰囲気になりました。さらに、館内のハロウィン装飾が雰囲気盛り上げてくれました。そこで、今年度も十月に、一～三年生、四～六年生の二回に分けて実施しました。

試行錯誤を繰り返しながら継続して実施している取組です。今後もよりよい取組となるよう工夫し継続していきたくと思っています。

中部研修参加報告

京都府立京都学・歴史館 加藤 大地

令和五年一月二十日（金）、箕面市立船場生涯学習センターを会場に「公共図書館と大学図書館の連携―箕面市立船場図書館と大阪大学外国学図書館の一体運営を例に―」と題して中部実務研修会が開催されました。

講師には、箕面市立船場図書館（所属：大阪大学附属図書館箕面図書館課）の日高正太郎氏をお招きし、公共図書館と大学図書館が一体となって運営する同館について、開館までの経緯やご苦労、開館後の状況、今後に向けた課題などを語っていただきました。

同館は、箕面市立萱野南図書館と大阪大学外国学図書館の蔵書を移転し、令和三年五月、箕面市船場東に新たに開館しました。公立の図書館を大学法人が将来にわたって指定管理者として運営するという珍しい形態をとっています。

近辺のまちづくりを構想していた箕面市長が大阪大学総長に提案したことから、いわばトップダウンで実現していた船場図書館。日高氏の率直なお話からも、このような政策的な決定による連携が図書館の現場でどのように受け止められ、難しい判断を迫るものだったかというところは十分に伺うことができました。

一方、利用者のメリットは明らかで

す。箕面市の利用者には、学術図書を多く所蔵する大学図書館の資料や研究個室等を利用できるという大きな恩恵があります。対する大学利用者にとつての主な利点は、船場図書館が属する公共図書館のネットワークを使って自館にない資料を容易に入手できることにあります。

開館後の入館者数や貸出冊数の増加は著しく、この新しい図書館が利用者に歓迎されていることを証明しています。いまも付近の開発は続いており、マンション建設の槌音が止むことはありません。今後、鉄道が延伸され交通が便利になれば一層の利用が見込まれます。

さて、第二、第三の船場図書館が今後各地に次々と誕生するかどうかは定かでないとしても、私たちは何をこの稀有な図書館から学ぶことができるでしょうか。日高氏が語った次の言葉が印象的です。

「移転当初から現在まで、「船場図書館はどんな場所であるのか」を、移転前の



図書館に馴染みのある人にも、新しく図書館を使い始める人にも知ってもらおうことが課題であり続けている。」

自らの足を問いつけること。それは、連携や統合のような一大事の有無にかかわらず、多様な価値観が交錯する時代にあつてどんな図書館にとつても避けがたい問いです。船場図書館はその問いを実践する後ろ姿を私たちに見せてくれているように思われます。

北部研修参加報告

京都府立図書館 横山 知尋

北部研修では、愛知県田原市図書館長の是任久美子氏をお招きし、お話を伺いました。田原市は人口約六万人の小さな町です。都市部から離れた地域の公共図書館という点で、京都府北部地域と類似します。地方の公共図書館の性質や日々の業務における実情を踏まえ、課題を共有し図書館の可能性を探る場となりました。

まず、第一部では、「地方の図書館における図書館サービスの課題と可能性について」と題し、まちづくりと図書館についてご講演いただきました。

財政難や人口減少等、様々な自治体の課題を背景に、住民が自ら情報収集しまちづくりを行う時代において、図書館はますます大きな役割を果たすことが期待されます。そこで重要なのは、地域の課題解決に貢献できる館であることです。そのため

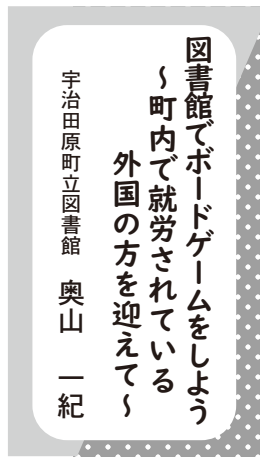
に、総合計画や図書館サービス計画といった方針を確認すること、他部署の職員と積極的にコミュニケーションを図ること、地域のニーズや出来事に関心を持つことの三点がまず必要です。地域へ出て、図書館のニーズを掘り起こすことが図書館の可能性をひらきます。図書館単独で考えるのではなく、地域全体に対する視線や、行政職員として問題意識を持たなければならぬと学びました。

更に、図書館には、地域住民や団体をエンパワーメントし、ウェルビーイング（心と身体と社会の良い状態）に貢献するよう求められるという指摘が大変印象的でした。図書館が自らのニーズや可能性を創造し、時代に応じた進化を続けることが、図書館自身の未来に繋がります。

また、図書館がまちづくり活動をエンパワーメントする例として、京都府のチーム・シラベルや、田原市図書館の取組の事例をご紹介いただきました。田原市民と図書館との会議である「かぶ会議」は、絵本『おおきなかぶ』に由来します。月に一度開催され、誰でも参加でき、地域と図書館について話し合う場です。この他、地域で活動する人への応援展示や、議員と住民との意見交換の場を設けるといった、情報提供から住民が集う場の運営まで、田原市図書館の活動は多岐に渡ります。利用者一人ひとりとの距離が近いことが地方の公共図書館の大きな特徴であるとし、その密接な関係を活かした取組を行っています。

第二部では、事前に参加者から日々の

業務で生じる疑問や課題を募り、一問一答の形式で問題を共有しました。田原市図書館での事例を教えて頂いたり、府内各館の例を挙げたりと、細かな疑問の解消の機会となりました。簡単に答えが出ない課題もありますが、まずは図書館員同士がこうした問題を積極的に共有し、意見交換ができれば、解決への一歩になるのではないかと思います。



宇治田原町では多くの外国の方が工業団地等で就労されています。中でもベトナム出身の方が最も多くを占めています。

今回のイベントは、昨年の図書館協議会の時に、図書館で人気の高いボードゲームの活用や町内に就労されている外国の方たちに対してのサービス等、様々な意見を具体的に形にしたものです。

イベントを行う目的に、町民の方に対して外国の方が多く就労されている現状を知ってもらい、その人たちの出身国に関心をもってもらえたらという思いがありました。町民との間で新たな出会いが生まれ、交流することで図書館の活性化につなげることができたらいいですね。当日は募集二十名に対して二十五名の

参加がありました。内訳は外国人六名(アメリカ人二名、ベトナム人四名)、日本人十九名(子ども十一名、大人八名)。大人から子どもまで全体的に打ち解けた様子で、楽しくガヤガヤと遊んでおられる様子でした。外国の方には難解なルールのゲームにも参加してもらいました。あつという間の二時間だったように思います。皆さん楽しく和やかな雰囲気なのか交流できたと思います。

さて、今回のイベントを準備するにあたり苦労した点や工夫した点に触れておきたいと思います。

まず、苦労した点として外国の方の募集があげられます。その方たちに参加してもらいたいので、いつもの町の広報誌、図書館だより、HP等以外に外国人向けの募集チラシを作成しました。特にベトナムの方が多いことを考慮して、募集チラシには日本語のほか、英語とベトナム語の三方国語併記としました。チラシの配布に関しては工業団地等の会社にご協力いただき、外国の方へ配布をお願いしました。募集チラシの作成と配布の事務にかなり時間をかけたこともあり、当館の規模ではなかなか大変でした。募集に関する事務がもう少し工夫できなかつたのか、今後の課題でもあります。

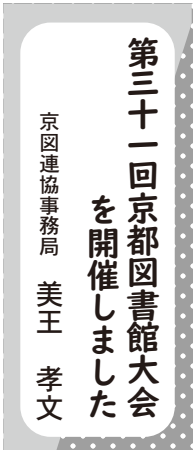
そして募集後、本当に外国の方の申し込みはあるのか、参加者がどなたも来られなかつたら看板倒れにならないだろうか、等々参加人数が読めない不安が当日まで続きました。さらに、文化の違う人

たちにボードゲームの面白さがわかってもらえるのか、ルールの説明や遊び方を理解してもらえるか、など考えればストレスがたまる日々でした。これに関しては、外国の方が理解しやすいようにひらがなでの説明書をルールガイドとは別に作成したり、ボードゲームの内容をイメージする本を会場内に展示するといったことに対応しました。

工夫した点としてはこのイベントに関連して、前もって二つのことを準備しました。一つは町民の方にベトナム語に親しんでもらえるよう、図書館内にベトナム語で書かれた絵本を展示したことです。もう一つは当日遊ぶボードゲームの種類を増やそうと、図書館職員数名で実際にシヨップに足を運び、ゲームの実演をみて新たに数種類のゲームを購入したことです。これで様々な年齢の方が楽しめるゲームが用意できました。

最後にもう一つの特徴として、国際交流という観点で町長部局と連携して実施したことがあげられます。ゲーム終了後に職員の方から参加したベトナムの方にアンケートを実施されています。今後外国の方にどういったサービスを行っていくことができるか、その基礎となる生の声を聞いたのは今後の町の方向性にプラスになると思います。

外国の方が参加するイベントは文化が違う部分もありますので難しい面があります。しかし、これからの図書館のイベントや方向性に何らかの可能性があるように感じました。



令和四年十一月二十八日に、第三十一回京都図書館大会をオンライン配信で開催しました。今大会は、「連携する図書館」をテーマに、基調講演には青山大学教授の小田光宏氏をお招きし、「連携のこそあど...図書館〇つながる」というテーマでお話いただきました。事例発表は、豊橋市まちなか図書館館長の種田滯氏から「地域図書館の挑戦」、板橋区立東板橋図書館館長の最上琴子氏から「地域密着型プロレス団体とのコラボにおける実践事例」、京都市岩倉図書館館長の井上典子氏から「地域とつながる」認知症にやさしい取り組みを中心とするというテーマで、それぞれご報告いただきました。

アンケートでは、「オンライン配信だったので遠方からでも参加しやすかった」、「連携について考えるきっかけができてよかった」、「事例発表もそれぞれ興味深い内容だった」といった感想が寄せられました。

